

評伝

桃花塾長 岩崎佐一先生 四

— その人と為りと御事業について —

会員 羽 柴 弘

先生の御葬儀の際、会葬者に配られた「故岩崎佐一塾長略歴」(以下略歴と呼ぶ)によると、先生の師範学校入学は明治二十九年九月で、卒業は明治三十四年三月である。したがって先生の在学は満四年と七か月ということになる。この最初の端数七か月は何であったか。当時の県下の教員養成の事情から、小学校令の改正、四四制(尋常四年、高等四年)推進のための短期養成の道が開かれ、先生はとりあえずこれに入り、更に翌年四月から四年制の師範学校本科に進まれたものではあるまいか。ともかくも四年有半、前号のべた通り教員としての専門課程と共に一般普通課程目を修め、これが教育教授の技術を充分身につけられた。

明治三十四年三月、先生は蚤雪の時を了えて晴れて大分県師範学校と卒業した。先生二十六才(満年齢二十四才)の春であり、雇教員でもなく准訓導でもない、大分県小学校本科正教員の免許状を持った、本科訓導の資格による立派な先生となつたわけである。

師範学校に在学中、先生はどのような勉強をなさつたか。具体的にいくわしくこれを知る由もないが、ただ一つ

次のようなことが「略歴」の中におげられている。

「米国のスタンレーホール博士の主張する児童研究を、高嶋平三郎・松本孝次郎・坂原政次の三氏により我國に輸入し、雑誌「児童教育」を發行、その終身会員となる。」

この頃より精神薄弱児教育に志す。」

これで見ると、先生は児童教育の研究と生涯の仕事と取り極め、恐らく雑誌数年分の会費を一時払込みして、終生の仕事と定められたと見たい。併せて数年永その胸中に育ちつた左精神薄弱児教育という大志願が、胎動をはじめたことかうなずけるのである。

明治三十四年四月、新卒の喜びひとしお、希望を胸いっぱい先生は佐伯所から二里ほど離れた粟村、上野村の小倉高等小学校に赴任した。正しくは組合立南海郡小倉高等小学校で、今の休生所上小倉、ちようど役場庁舎の向つて左手に平屋の長い校舎が建ち、上野村・明治村・切畑村三か村に現在の本正村が加つての組合立であつた。

当時の学校について、今手許に資料がないので正確な詳細なことは後日を期すより外ないが、尋常小学校を修了したばかりの、今の五年生以上にある従真が少年達を前にして、先生の教壇生活ははじまつた。(あるいは本会の顧問平田幸市先生など、紅顔の少年の日に直接岩崎先生の訓とうを受けられたらぬであらまいか。

しかし、先生は在任二年半、明治三十七年九月再び大分の地に転出することになつた。

当時の大分はまだ大分所と称して(市制施行は明治四十四年)、大分と別府の間は電車は未だ通じていないが、鉄道はまだ柳が浦までの時代、おまづかに明治三十三年に電燈がついたまでのところであつた。しかし日電戦争が

はじまり、郷土部小倉師団が諸戦以來赫々たる捷報を
 伝えていた頃として、恐らく驟然たるものがあつたであらう。
 先生の迎へられた学校は大分高等小学校といふことであ
 るが、「略歴」にある「大分県南海部郡大分高等小学校」
 は「大分郡」とすべきところ、くわしく書けば「大分郡大
 分町大分高等小学校」となるわけである。何故の転任で
 あつたか、恐らく先生の「つづつたる志望」と、大分町方
 面の教育界が、地に埋まれている人材を抽き出した、
 その両方ではなかつたか。

日露の大戦役は勝利のうちを終り、國民教育の重大さ
 が改めて叫ばれ、小学校教育の普及が強く要望されて、
 各所村の尋常小学校に、高等小学校が併設されることにな
 つた。つまりこれまで全く別々に存在していた尋常高
 等を一学校に統合したわけである。その新しい気運の中
 に際立つた、大分郡石城川村の、村立石城川尋常高等小
 学校の訓導兼校長として赴任した。明治三十九年四月の
 ことである。

(附記) この訓導兼校長という職名、何々尋常高等小学校といふ
 校名の呼ぶ方は昭和十六年四月の國民学校令の発足まで、尋常科
 六年、高等科二年の八年制は、終戦後の六三制新教育までつづ
 けたものである。

石城川小学校長の存命は、特別な抜擢であつたことが
 充分考へられる。時に先生はいまだ独身、二十九才の青
 年教育家、理想にもえ滿身覚悟への教育愛一杯であつた
 このころの、先生の教育実践について知りたいが、石城
 川にこの辺と解明してくれるものがあつかうか。

ちようどこの年、桃花塾教育のよき協力者難佐江夫人
 との出会いがあつた。夫人は大阪の生まれ、故あつて大
 分町に居住なされてゐた。その辺の事情について、先生

はこう書かれている。

「妻は生粋の大阪人であつた。……その後西親と別れ
 てから、大分市船頭町の笠木という老人の内に寄寓し
 ていた。私は南豊解限の地に生まれた田舎人である。
 当時大分市に住まつていた。」

ある時私ども二人の邂逅が、縁の結ばれるきっかけ
 になつたのであるが、想うに天のひきあわせとでもい
 うものであらう。

その後私ども二人は交際を続けること一か年、妻の
 愛情が尋常でなかつたことが、遂に私共して結婚を決
 意するに至るしめ(中略)いよいよ大分市にて、日野氏
 と結婚人として結婚したのである。明治四十年三月で
 あつた。」

(岩崎佐一著「人生を生く」による)

この難佐江夫人との交際をして結婚のことは、先生の
 石城川の校長時代と殆んど一致するようである、新家庭を営
 むいくばくもなく、明治四十年四月、また再び母校佐伯
 高等小学校の訓導として佐伯に帰つて来た。新夫人と伴
 つてである。

御両親はまだ御健在であつたとすると、もう六十歳と
 こえておられたであらう。新夫婦を迎えて花びらおいだ
 であらう御家庭は、仲所三丁目以前のところであつた
 か、あるいは別のところであつたか。穿さくすればわか
 りもしようが、今みとこみればそのままにして次に移
 ることにしよう。

佐伯高等小学校一か年後の明治四十一年四月、先生
 は当時の下堅田村立良尋常高等小学校訓導兼校長と
 なつた。校地は下堅田村長良、宇山が東に低く仰んだそ
 の端にあり、大字堅田と大字長良の字がそこには学ん
 でいた。

(つづく)